

# 『クラリスとラリス』

コリンヌ・ピエールヴィル  
渡 邊 浩 司 訳

## 訳者前書き

本稿は、中世フランス文学がご専門のコリンヌ・ピエールヴィル氏（フランス・リヨン第3大学教授）による書き下ろしの拙訳である。ピエールヴィル氏は2008年に、中世フランス語韻文による13世紀後半の作『クラリスとラリス』（*Clariss et Lariss*）の校訂本と研究書『「クラリスとラリス」、13世紀の物語大全』（*Clariss et Lariss, somme romanesque du XIII<sup>e</sup> siècle*）をパリのオノレ・シャピヨン出版から刊行し、この作品に精通しておられる研究者である。8音節詩句で3万行以上を数えるこの長編アーサー王物語は日本では未紹介であるため、要を得た解説を用意して下さった。この場をお借りし、ピエールヴィル氏に深謝したい。なお〔 〕を挟んで補った注は、訳者が追加したものである。

13世紀後半に『クラリスとラリス』<sup>1)</sup>を著した作者の名は知られていな

---

1) この物語は、フランス国立図書館が所蔵するフランス語写本1447番（王のコレクション7534番、旧コルベール図書館3128番）に残されている。この写本については、アルベール・アンリが『アドネ・ル・ロワ作品集』第1巻で詳細に記している（Albert Henry, *Les œuvres d'Adenet Le Roi, tome I, La tradition manuscrite*, « De Tempel », Tempelhof 37, Brugge (België), 1951, p. 119-120）。

い。この作品は正確には1270年頃の作だと思われるが、それはプロローグに出てくる歴史上の事件への2つの言及が年代の特定につながるからである。2つの言及のうちの1つは、コンスタンティノープルをビザンツ人〔東ローマの亡命政権ニカイア帝国〕が1261年に奪回した事件である。もう1つはアンティオキアの滅亡であり、1268年5月1日にマムルーク朝のバイバルス〔第5代スルタン〕がこの町を掌握した<sup>2)</sup>。このようにこの長編物語は、散文物語が広く普及するようになった時期に生まれているが<sup>3)</sup>、作者は散文ではなく平韻〔脚韻がaabbの形で並ぶ押韻〕の韻文形式を選択している。これはヴァースの『ブリュット物語』〔ジェフリー・オヴ・モンマス作『ブリタニア列王史』の古フランス語による翻案作品、1155年〕からクレティアン・ド・トロワの物語群〔現存第1作『エレクトクとエニッド』は1170年頃、遺作『グラアルの物語』は1181年頃の作〕にいたる、アーサー王伝説の草創期の精神および様式と改めてつながりを持たせようとしたことを示唆している。それでもこの作品は同時代の影響を色濃く受けており、特に百科全書の嗜好が顕著である<sup>4)</sup>。8音節詩句

---

2) こうした史実については、クロード・カアンの著作とデイヴィッド・ジャコビーの論考を参照 (C. Cahen, *La Syrie du Nord à l'époque des Croisades et la principauté franque d'Antioche*, Paris, éditions P. Geuthner, 1940 ; D. Jacoby, « The Latin Empire of Constantinople and the Frankish States in Greece », *The New Cambridge Medieval History. Volume V, c. 1198–c. 1300*, ed. D. Abufalia, Cambridge University Press, 1999, p. 525–542)。

3) 散文という物語形態の選択については、『中世研究誌』第5号所収の資料 (*Cahiers de recherches médiévales*, 5, 1998, p. 7–164, *Le choix de la prose (XIII<sup>e</sup>–XV<sup>e</sup> siècles)*)、なかでもエマニュエル・ボームガルトネルによる序文 (E. Baumgartner, p. 1–13 « Le choix de la prose ») を参照。さらにはカトリーヌ・クロワズィ＝ナケの論考も参照 (C. Croizy-Naquet, « Écrire l'histoire : le choix du vers ou de la prose aux XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles », *Médiévales*, 2000, 38, p. 71–85)。

4) 13世紀と14世紀における百科全書の嗜好については、最新の研究成果の中から文献のタイトルを数点のみ挙げることにする (B. Beyer de Ryke,

30372 行からなるこの作品<sup>5)</sup>は、中世期に韻文で書かれたアーサー王物語の中でも特に長編の部類に入るが、当時の文学大全として描かれている。武勲詩、年代記、古代物語、韻文および散文によるアーサー王物語、典拠となるフォークロアは、登場人物、モチーフ、形式的な表現や手法を、創作にあたった教養豊かな学僧に提供していたのである<sup>6)</sup>。作者は模倣を行っているが、それは決して盲従的なものではなく、騎士道と恋愛の倫理を一新するのに役立った。実際、騎士道と恋愛の倫理は、1230年代から『アーサー王の死』[古フランス語散文による「聖杯物語群」の掉尾を飾る作品、1230～1235年頃]とともに人気がなくなって忘れ去られる運命にあったと思われるからである。

---

« Le miroir du monde : un parcours dans l'encyclopédisme médiéval », *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 2003, 81-84, p. 1243-1275 (この学術論文には中世の百科全書に関する参考文献が記されており、とても有益である) ; *Encyclopédire. Formes de l'ambition encyclopédique dans l'Antiquité et au Moyen Âge*, éd. par A. Zucker, Nice, CEM 14, 2013 ; M. Franklin-Brown, *Reading the World, Encyclopaedic Writing, in the Scholastic Age*, Chicago Press, 2012 ; *Lire, choisir, écrire : la vulgarisation des savoirs du Moyen Age à la Renaissance*, ss. la dir. de V. Giacomotto-Charra et Chr. Silvi, Paris, Editions de l'École nationale des chartes, 2014 ; B. Ribémont, *La Renaissance du XII<sup>e</sup> siècle et l'encyclopédisme*, Paris, Champion, 2002 ; I. Ventura, « Enzyklopädie », *Die Rezeption lateinischer, Wissenschaft, Spiritualität, Bildung und Dichtung aus Frankreich*, dir. F. P. Knapp, Berlin-Boston, 2014, De Gruyter, p. 161-199)。

- 5) ラティミエ・イオノフがレンヌ第2大学に提出した博士論文 (A. Latimier Ionoff, *Lire le nom propre dans le roman médiéval: onomastique et poétique dans le roman arthurien tardif en vers (Les Merveilles de Rigomer, Claris et Laris, Floriant et Florete, Cristal et Clarie, Melyador)*, thèse de doctorat, Université de Rennes 2, 2016) を参照。
- 6) マルティン・クローゼの著作 (Martin Klose, *Der Roman von "Claris und Laris" in seinen Beziehungen zur altfranzösischen Artusepik des XII. und XIII. Jahrhunderts, unter besonderer Berücksichtigung der Werke Crestiens von Troyes*, Halle A.S., Verlag von Max Niemeyer, 1916) および拙著 (C. Pierreville, *Claris et Laris, somme romanesque du XIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Champion, 2007) を参照。

『クラリスとラリス』の物語は、ガスコーニュ [現在のフランス南西部] の宮廷から始まる。そこはアーサー王物語において、特別な名声とは無縁の地域である。そして最初の主役の座を、まったく無名のクラリスという若者が占めている。クラリスは出自がはっきりしないエダリス公の息子であるが、このことは、アーサー王騎士団が再生と存続を望むのであれば新たな力を取りこむべきだという作者の意図を示唆している。物語の冒頭の春の場面で、果樹園にいたクラリスは恋愛物語 [『ピュラムスとティスベ』と『フィラミュスとエベ』] を夢中になって読んでいた。多くの中世の作品はこのように「新緑」のトポスから始まるが<sup>7)</sup>、ここでは鏡の遊戯 (作用) [作中の諸要素が互いに反響しあうこと] と紋中紋手法 [作品の内部に別の作品をはめこむこと] によって意味合いが変えられている [物語の中で登場人物が別の物語を読むという例は、クレティアン・ド・トロワ作『ライオンを連れた騎士』(1178年頃)にも出てくる]。当時の諸作品から生まれたこの作品は、文学の目指すところが何かについて問うているだけでなく、文学の消滅についても問うている。それは、[13世紀後半の時点で] あらゆることが言い尽くされ、書き記されたかのように思われていたためである。

果樹園を離れたクラリスは、王妃リデーヌのもとへ肉切り役の仕事に向かい、食卓で給仕を行ううちに王妃へ恋心を抱く<sup>8)</sup>。そして、自分と同じ

---

7) たとえば、『オランジュ占領』(*La Prise d'Orange*, éd. par Cl. Régnier, Klincksieck, Paris, 1986, v. 39-51)、[クレティアン・ド・トロワの遺作]『グラアルの物語』(*Le Conte du Graal*, publ. par F. Lecoy, Paris, Champion, 1992, v. 69-94)、ギヨーム・ド・ロリス作『薔薇物語』前半 (*Le Roman de la Rose de Guillaume de Lorris*, publ. par F. Lecoy, Paris, Champion, 1966, v. 45-83) を参照。中世期の詩の伝統を受け継ぐこのトポスについては、ピエール・ベックの著作 (P. Bec, *La Lyrique française au Moyen Âge (XII<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles)*, Paris, Picard, 1977-1978, tome I, p. 136-41) を参照。

8) クラリスは、他の物語の主人公たちを思い起こさせる。たとえば、『アマ

日に騎士に叙任された、王妃の兄弟にあたるラリスと親友になる。2人の名前を並べた物語のタイトルが示しているように、この作品の眼目は戦友たちの連帯である<sup>9)</sup>。友情のおかげで恋の苦しみが和らげられ、意中の女性を難なく手に入れ、主人公たちは常に実力以上の力を発揮する。しかしクラリスにとって、主君ラドン王の臣下としての義務に反するのはあり得ないことだった。『アーサー王の死』は、ランスロと王妃グニエーヴルの姦通愛がいかにしてローグ王国 [アーサーの王国] を破滅へ導いたかを明らかにしたが、『クラリスとラリス』は不倫関係とは無縁の物語となり、ランスロの名は馬上槍試合の最中に比較の対象として1度出てくるのみである。作者は「至純愛 (フィナモール)」から恋愛と友情に関わる感情の昇華とそれが契機となる騎士の武勇だけを取り上げ、封建社会のバランスを危うくする可能性のあるものをすべて入念に削除している。

クラリスとラリスは騎士に叙任されるとすぐに一人前になるための修行をしようと、ブルターニュのアーサー王のもとへ向かう決意を固め、ガス

---

ダスとイドワーズ』 (*Amadas et Ydoine*, éd. par John R. Reinhard, Paris, Champion, 1998, v. 243 sq.)、フィリップ・ド・レミ作『ジャンとブロンド』 (*Jehan et Blonde*, de Philippe de Rémi, éd. par Sylvie Lécuyer, Paris, Champion, 1984, v. 425 sq.)、『グリグロワ』 (*Gliglois*, éd. par M.-L. Chênerie, Paris, Champion, 2003, v. 423 sq.) を参照。

9) 『クラリスとラリス』は、『アミとアミル』 (*Ami et Amile, chanson de geste*, éd. par Peter F. Dembowski, Paris, Champion, 1987)、『アティスとプロフィリヤス』 (*Athis et Prophilius*, éd. M.-M. Castellani, Champion, 2006) など、タイトルに2人の友人の名を並列させている他の作品を思い起こさせる。中世文学における友情については、ミシュリーヌ・ド・コンパリュエ・デュ・グレの著作 (*Micheline de Combarieu du Grès, L'Idéal humain et l'expérience morale chez les héros des chansons de geste (des origines à 1200)*, Aix, Publications de l'Université de Provence, 1980)、レジヤイナ・ハイアットの著作 (*Regina Hyatte, The Arts of Friendship: the Idealization of Friendship in medieval and early renaissance Literature*, ed. by E. J. Brill, New-York, 1994)、ユゲット・ルグロの著作 (*Huguette Legros, L'Amitié dans les chansons de geste à l'époque romane*, Aix, Publications de l'Université de Provence, 2001) を参照。

コーニュの宮廷を離れる [ブルターニュは、島の大ブリテンと大陸の小ブリテンの両方を指している]。2人は旅の途中で、円卓騎士団の名だたるメンバーたちに救いの手を差し伸べる。泉の貴婦人とともに城に捕らわれていたイヴァン、[4人の]騎士に襲われて恋人と離れ離れになっていたゴーヴァン、3対1の不利な戦いに追いこまれていたカラドック、邪悪な王 [トアス] に捕らわれていたオルカニーのロット王、マルク王、ボードマギユ王を、2人は次々と助け出す。クラリスとラリスは、こうした名だたる騎士と相互扶助のネットワークを少しずつ築き上げるとアーサー王自身の面識を得て、ついにはローマ軍との戦役でアーサー王の軍に加勢するようになる。『クラリスとラリス』のこの戦役は、モルドレ [英語名モードレッド] の裏切りとローグ王国崩壊への序章ではなく、2人の主人公の活躍によりブルターニュの騎士たちが成し遂げる新たな征服の時代の幕開けとなっている。ラドン王の死後、主君が不在となっていたガスコーニュから、スペイン、デンマークへと、勝利の波が徐々に広がっていく。[物語の中間地点で] クラリスはリデーヌと結婚してスペインおよびガスコーニュの王となり、物語の最後にラリスはイヴァンの姉妹マリーヌと結婚してドイツおよびデンマークの王となる。アーサー王のもたらす平和はこのように、西はブルターニュ、北はデンマーク、東はドイツ、南はガスコーニュおよびスペインへと、四方へ広がっていった。物語のプロローグでは13世紀に起きていた終わりのなき紛争という現実が糾弾されているが、この物語は全世界的な融和というユートピアで幕を閉じている<sup>10)</sup>。

こうした領土の征服と恋愛の成就是、騎士たちによる多くの探索と絡み合っている。実際、ラリスは2度にわたって連れ去られ、クラリスが円

---

10) 中世期におけるこうしたユートピアの概念については、マリー＝ルイーゼ・オリエの論考 (Marie-Louise Ollier, « Utopie et roman arthurien », *Cahiers de Civilisation Médiévale*, 27, 1984, p. 223-32) を参照。

卓騎士団のメンバーとともにラリスの探索に向かう。クラリスに同行した騎士の数は、1度目が10人、2度目が30人だった。一行が遍歴のさなかに経験するさまざまな試練は、散文作品によくある編み合わせの手法<sup>11)</sup>で交互に語られ、それぞれの騎士が一時的に主役の座を別の騎士に譲っている。北フランス出身の作者は、探索中の騎士が経験した予期せぬ出来事を余すところなく語ることで、多岐にわたるこれらの探索で起こりうることをすべて伝えている。この作者はそれぞれの騎士に少なくとも1つのエピソードで主役の座を与えているが、騎士によっては数百行しか費やさない場合もある。そして、ある時には騎士のお決まりの武勲を語り、またある時にはカログルナンが魔法の城で乙女の姿に変えられたエピソード<sup>12)</sup>の

11) 編み合わせの手法については、以下の論考や著作を参照 (E. Baumgartner, « Les techniques narratives dans le roman en prose », *The Legacy of Chrétien de Troyes*, vol. I, Edit. by Norris J. Lacy, Douglas Kelly and Keith Busby, Amsterdam : Rodopi, 1987, p. 167-90 ; E. Baumgartner, « Retour des personnages et écriture du roman (XII<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles) », *Personnage et histoire littéraire*, Actes du colloque de Toulouse, 16/18 mai 1990, textes recueillis et présentés par Pierre Glaudes et Yves Reuter, Presses Universitaires du Mirail-Toulouse, 1991, p. 13-22 ; D. de Carné, « L'entrelacement : une technique narrative à l'épreuve du *Perceforest* », *Perceforest. Un roman arthurien et sa réception*, éd. C. Ferlampin-Acher, Rennes, Presses Universitaires de Rennes, 2012, p. 225-237 ; A. Combes, *Les Voies de l'aventure*, Paris, Champion, 2001, p. 403-72 ; D. Kelly, « Multiple Quests in French Verse Romance : *Merveilles de Rigomer* and *Claris et Laris* », *L'Esprit créateur*, 9, 1969, p. 257-266 ; F. Lot, *Étude sur le Lancelot en prose*, chap. II, Paris, Champion, 1918 ; A. Micha, *Essais sur le cycle du Lancelot-Graal*, Genève, Droz, 1987, p. 94 sq. ; Ph. Ménard, « L'entrelacement dans le *Tristan en prose* », *De Chrétien de Troyes au « Tristan » en prose. Études sur les romans de la Table Ronde*, Genève, Droz, 1999, p. 163-9 ; E. Vinaver, *À la Recherche d'une poésie médiévale*, Paris, Nizet, 1970)。

12) このエピソードについては、キース・バズビーの論考 (K. Busby, « Plus acesmez qu'une popine ». Male cross-dressing in medieval French Narrative », *Gender Transgressions. Crossing the Normative Barrier in Old French Literature*, edited by Karen J. Taylor, New York and London, Garland, 1998, 203 p. (Garland reference library of humanities ; 2064), p. 45-59) を参照。

ような思いがけない出来事を語る。長編であるためこの物語にはかなりの数の作中人物が登場するが、編み合わされた個々の話の関係が戦友たちの連帯という主要なテーマを際立たせていることから、物語の意味に合うようにあらかじめ定められたプランに沿って書かれたものであると考えられる。

『クラリスとラリス』の作者は、中世文学に多く見られるような、幸福と恋愛と貴婦人の探索を1人で行う主人公の個人的な栄誉を称えるような作品を書こうとはしていない。この作品は円卓騎士団の仲間全体に広がっていく友情をメインテーマとしており、クラリスとラリスが円卓騎士団に及ぼす影響により友情の輪が広がっている。2人の主人公の名がよく似ていること、主な筋書きの展開が対になる構成を取っていること<sup>13)</sup>は、作者が望む固い友情で結ばれた双子のようなペアを物語中で反映しているためである。中世の作品群は、恋愛のせいで時に人々が自分の殻に閉じこもったり、騎士としての義務をなおざりにしたりする場面を描いている<sup>14)</sup>。それに対して『クラリスとラリス』の作者によれば、友情こそが正しい大義のために戦うよう騎士に促す実りある原則なのである。確かに、2人の主人公は貴婦人に恋心を起こさせ、自らも恋心を抱く人物である。しかし姿を消した友人ラリスの探索のほうが、愛する貴婦人の探索よりも優先されている。こうした姿勢は、相応の理想を見つけ出すことでさらに拡大していく騎士共同体をつなぐ絆となっている。

---

13) たとえば、2度のブルターニュへの旅、2度にわたるラリスの探索、スペイン軍との2度の戦争、デンマーク軍との2度の戦争、あるいは主人公たちが身許を隠して参戦する2度の馬上槍試合が挙げられる。

14) 『エレックとエニッド』の描くエレックが、こうした騎士に相当する (*Erec et Enide*, publ. par M. Roques, Paris, Champion, 1990) [エレックはエニッドとの結婚生活に感溺して、一時的に騎士としての本分を忘れてしまう]。ダグラス・ケリーの論考 (D. Kelly, « La forme et le sens de la quête dans l'*Erec et Enide* de Chrétien de Troyes », *Romania*, 92, 1971, p. 326-358 を参照)。

こうした理想は、[神の次元ではなく]人間の次元に置かれている。このアーサー王物語では、メルラン [英語名マーリン] がデンマークの森で隠棲し、漠とした罪を死ぬまで償うが、「聖杯」の不在には驚きを禁じ得ない。この物語ではアーサー王に仕える騎士全体に特別な位置を与えられているが、ガラアド [ランスロの息子で、『聖杯の探索』の主人公] とボオール [ランスロの従弟] の存在については黙して語られず、ペルスヴァルは『クリジェス』 [クレティアン・ド・トロワの現存第2作、1176年頃] で描かれていたように勇敢な騎士へ逆戻りしているだけである<sup>15)</sup>。作者はアーサー王騎士団を、先人たちが膨大な聖杯物語群の中で描いてきたような、霊的な探索へ向かわせようとはしておらず、逆に騎士道の倫理を非神聖化している。この物語には、神の介入への言及がまったくない。神に選ばれた君主が臣民を信仰の道へ導くというアウグスティヌス的な思想<sup>16)</sup> は、この作者にはまったく無縁であるように思われる。物語中に点在する数少ない隠者は、遍歴騎士に痛悔や悔悟を求めようとはしない。作者は聴衆に宗教上の教えを伝えることをよしとせず、キリスト教徒に果たすべき義務を思い起こさせるための教訓的な詩行は、8音節詩句の約3万行のうち全部で約15行だけに限られている<sup>17)</sup>。『クラリスとラリス』の登場人物は罪を恐れていないため、罪深い性質から抜け出せない魂を助ける必要がない。信仰の恐怖から解き放たれた彼らは、虐げられた人たちの解放、弱者たちの保護、正義と法の維持といった、現世での人助けの任務に力

15) 『クリジェス』 (*Cligés*, publ. par A. Micha, Paris, Champion, 1982) 4774行～4797行を参照。この物語でのペルスヴァルは、アーサー王宮廷にいた勇敢な騎士の1人であり、馬上槍試合ではクリジェスの引き立て役になる。

16) ドミニック・ブーテの著作 (D. Boutet, *Charlemagne et Arthur ou le roi imaginaire*, Paris, Champion (Nouvelle Bibliothèque du Moyen Âge 20), 1992) 中、特に p. 169-183 を参照。

17) 1つ目の節 (v. 1305-15) は熱心にミサへ参列する必要性を説き、2つ目の節 (v. 3787-9) は法王が我々の霊的な父であると述べている。

を注ぐことができる。

こうした「人間」重視の見方が語り全体に行きわたっているため、結果的に「驚異」は特別な形で扱われている。作者は、ケルト起源の超自然のような奇跡的な介入や悪魔的な介入を制限している。作品を表面的に読めば、確かに不可思議な人物が多いという第一印象を受けるかもしれない。しかし作者は常に人間を重要視し、「驚異」の部類に属する特定の人物から超自然的な特徴を取り除いている。『クラリスとラリス』では、小人<sup>18)</sup>は悪魔的な存在ではなく、自らの奇形や生来の体格ゆえの非力で苦しむ小柄な騎士である。また、「妖精の谷」の番人、リュカンが森で倒すブルトン人、ゴーヴァンの心臓を食べる決意をしていた騎士ウトラジュー、あるいはクリジェスが森の奥で殺める醜い農夫など、巨人と思われる複数の人物が普通の背丈で描かれている。作者はさらに驚異の裏側を暴き、妖精については実際に、哀れみの気持ちが欠落した女妖術師であり、魔法を駆使して騎士たちを閉じこめたり自在に操ったりする人物として描いている。その典型が妖精マドワヌであり、作者は13世紀の物語群でモルガーヌが常に持つ欠点のすべて<sup>19)</sup>をマドワヌに与えている。『クラリスとラリス』では不可思議な世界の美、華麗さ、調和は幻想であり、すぐに雲散霧

---

18) 小人については、アンヌ・マルティノーの著作 (A. Martineau, *Le Nain et le chevalier. Essai sur les nains français du Moyen Âge*, Paris, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2003) を参照。

19) 13世紀の物語群が描くモルガーヌについては、ロランス・アルフ＝ランクネールの著作2点 (L. Harf-Lancner, *Les Fées au Moyen Âge, Morgane et Mélusine, la naissance des fées*, Librairie Honoré Champion, Paris, 1984 ; *Le Monde des fées dans l'occident médiéval*, Hachette Littératures, 2003)、クリスティーヌ・フェルランパン＝アシェの著作 (C. Ferlampin-Acher, *Fées, bestes, et luitons. Croyances et merveilles dans les romans français en prose (XIII<sup>e</sup>-XIV<sup>e</sup> siècles)*, Paris, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2002, p. 121-169 et 251-261)、ウジェーヌ・ヴィナーヴァの論考 (E. Vinaver, « La fée Morgain et les aventures de Bretagne », *Mélanges J. Frappier*, Genève, Droz, 1970, p. 1077-83) を参照。

消する。また人間の世界に敵対する妖精は、悪癖が強調されているために墮落した人類に似た姿で描かれ、主人公たちは己の決然とした覚悟と勇氣により最終的には妖精に勝利する。このように、この作品の登場人物は己の力で幻想的な存在の動きを封じることができるため、超自然や奇跡の仲介を必要としないのである。彼らが成功を手にするには己の勇氣や大胆さ、互いを結びつける戦友たちの連帯の力だけで十二分なのである。

作者は、天上での神の祝福へ向かうよりはむしろ、主人公に仲間のことを心配し、外界の力に関心を抱くよう勧めている。作者が思い描く騎士団は、寒そうにうずくまってしまうような組織ではなく、社会の上流階級の出身でなくとも善良な人であれば誰でも迎え入れる。作者はアーサー王物語で広く流布していた貴族中心の偏った考え方と袂を分かち<sup>20)</sup>、己の個人的な功績によって騎士階級の一員となり封土を授けられた人々、つまり家令や「働く者」、礼節をわきまえた代官、誠実な羊飼ひ、献身的な「農夫」の名誉を回復している。各人の価値を公に認めることで中世の貴族的な世界観が消え去り、相互扶助、友情、共同体に仕えようとする意志が、個人主義や階級意識に取って代わるのである。

このように『クラリスとラリス』が目指したのは、恋愛術と友情術、「驚異」や奇跡に警戒しながらも仲間を助けるために己の武勇をいかす技術、先行作品群を踏襲しながらも「定型表現（トボス）」を時流に合わせて使うことで文学を存続させるための物語の書き方である。書物はあらゆる

---

20) アンティーム・フーリエの著作 (A. Fourier, *Le courant réaliste dans le roman courtois*, Paris, Nizet, 1960) とエーリッヒ・ケーラーの著作 (E. Köhler, *L'Aventure chevaleresque. Idéal et réalité dans le roman courtois*, Gallimard, NRF, 1974, p. 15-24) を参照。『クラリスとラリス』の作者は、ジャン・ド・マンと同じ思想の潮流を共有している。なぜならジャン・ド・マンは『薔薇物語』後半で、人間は生まれた時はみな同じであり、高貴さは生まれではなく、個人的な功績によると述べているからである (*Le Roman de la Rose* (publié par F. Lecoy, Paris, Champion, 1966-1970, CFMA 92-95-98, v.18872 sq.))。

る知識の受け皿となり、多岐にわたる文学伝承の交差点で、物語は新しい世界観と人間観がほとぼしり出るスクリーンとなった。このような試みは同時代の人々を魅惑した。その証拠に、『クラリスとラリス』は13世紀後半の別の作品『フロリヤンとフロレット』<sup>21)</sup>に大きな影響を及ぼしている。あらゆる教条主義と無縁の作者は、『クラリスとラリス』の中に一連の面白い冒険だけを認めるのか、それとも13世紀後半の人間および作家に相応しい生き方をめぐる一層深い洞察を読み取るのかを、読者の自由に任せている。

謝辞 本研究はJSPS 科研費JP20K00481の助成を受けたものである。ここに特記し感謝の意を表したい。

---

21) 『フロリヤンとフロレット』はアニー・コンブとリシャール・トラクスラーによる校訂本 (*Floriant et Florette*, éd. A. Combes et R. Trachsler, Champion Classiques, Moyen Âge, Paris, 2003) を参照。